



写真

中村史子

1840年代以降、中国および日本を皮切りにアジア諸国に欧米より写真技術が伝えられた。やがて開港地では、外国人客に向けた「エキゾチック」な写真が撮影、販売されることとなる。例えば、日本では風景や芸妓などの風俗をモチーフとした「横浜写真」が人気を博した。これら写真は外部の眼差しに応える形で国のイメージを演出するものだが、一方で写真は国内において国のアイデンティティの画定にも用いられた。為政者のイメージが写真を通じて広く共有されるなど、写真は近代的な国民国家の成立と深く関わっている。

その後の写真の展開についての詳細な説明は省くが、今現在もまた、写真は社会においてアクチュアルな存在であり続けている。例えば、世界各地で起きている政治的抗議活動において、スマートフォンによる撮影とSNSを通じたシェアは大きな意味を持つ。写真によって、より幅広い人々の関心を引き、賛同を得る事ができるためだ。一方で、カメラによる身元特定を容易にすべく、デモや集会参加者の覆面を禁ずる地域もある。情報の発信と拡散、情動の揺さぶり、監視と管理など、写真が持ついくつかの側面をここに見てとる事ができる。



フェリーチェ・ベアト《茶器の横で琴を奏でる女性》1860年頃、メトロポリタン美術館蔵、ガラス板の陰画からプリントした鶏卵紙に手彩色